

=== T A C S 情報 第 4 号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和 7 年 6 月 17 日

農業技術課 広域普及指導センター

1 気象経過

(1) 気温

5 月の平均気温は、17.7℃（対平年差+0.2℃）と平年並であった。

6 月上旬の平均気温は、20.6℃（同+0.3℃）と平年並であった。

6 月 3 半旬の平均気温は、21.8℃（同+0.8℃）と平年に比べ高かった。

(2) 降水量

5 月の降水量は、122.0mm（対平年比 99%）と平年並であった。

6 月上旬の降水量は、28.5mm（同 135%）と平年に比べ多かった。

6 月 3 半旬の降水量は、40.5mm（同 184%）と平年に比べ多かった。

(3) 全天日射量

5 月の平均全天日射量は、18.4MJ/m²/日（対平年比 100%）と平年並であった。

6 月上旬の平均全天日射量は、17.5MJ/m²/日（同 89%）と平年に比べ少なかった。

6 月 3 半旬の平均全天日射量は、12.9MJ/m²/日（同 74%）と平年に比べ少なかった。

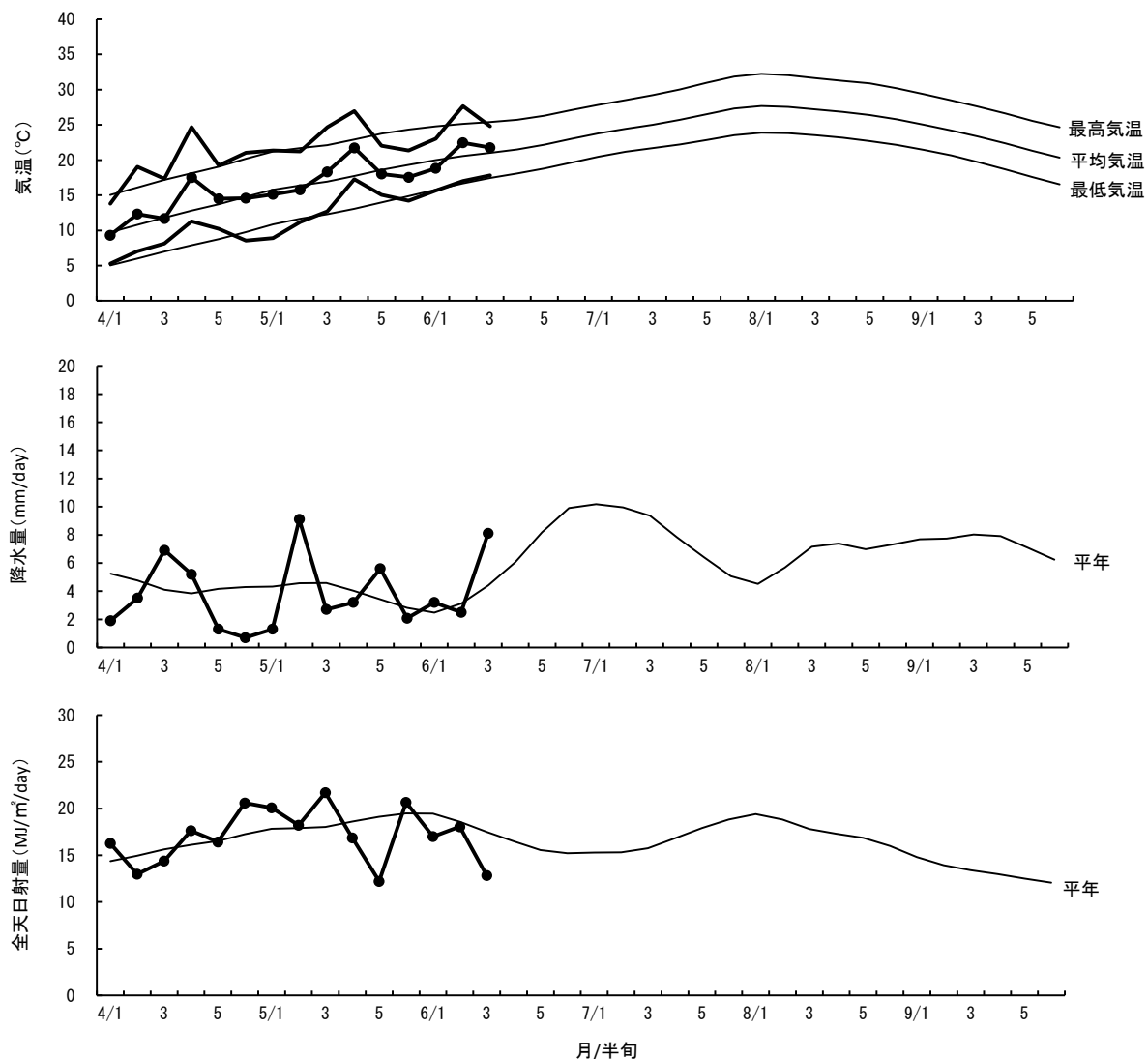


図 1 令和 7 年の気象経過（富山地方気象台）

2 生育状況（生育観測ほデータ）

（１）てんたかく

平年に比べ、草丈、茎数、葉齢及び葉色は並となっている。

幼穂形成期は、平年並の6月24日頃と見込まれる。

表1 「てんたかく」の生育状況（6月17日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD	
R7	4月30日	42.8	30.6	629	10.1	4.5	43.3	(6月24日)
R6	5月2日	44.4	31.2	667	10.6	4.5	44.5	6月25日
平年	5月3日	43.5	28.8	620	10.2	4.5	42.2	[6月24日]
前年比・差	-2	97	98	94	-0.5	0.0	-1.2	(-1)
平年比・差	-3	98	106	101	-0.1	0.0	1.1	(0)

注1) 平年：H27～R6の平均、ただし幼穂形成期の平年値[]は、R2～6年の平均

注2) R7の幼穂形成期は予測値

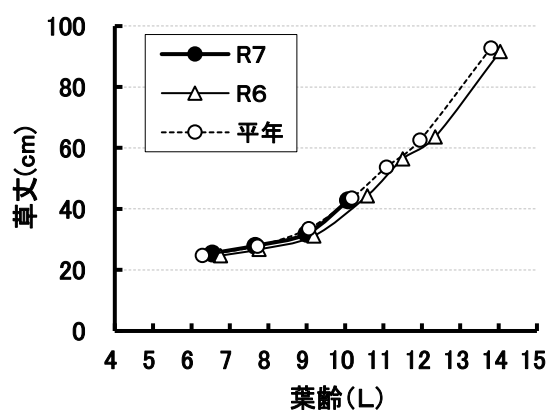


図2 草丈の推移（生観てんたかく）

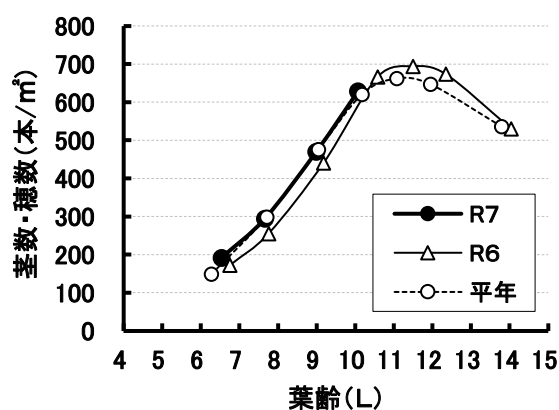


図3 茎数の推移（生観てんたかく）

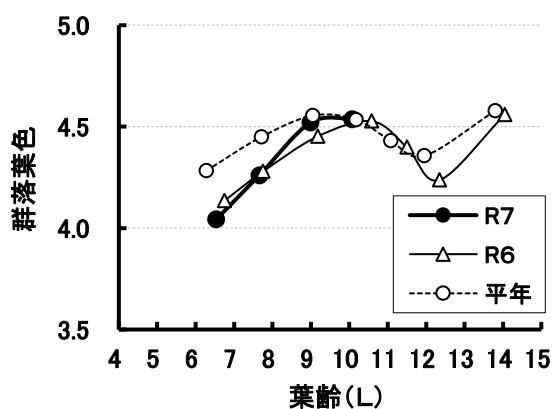


図4 葉色の推移（生観てんたかく）

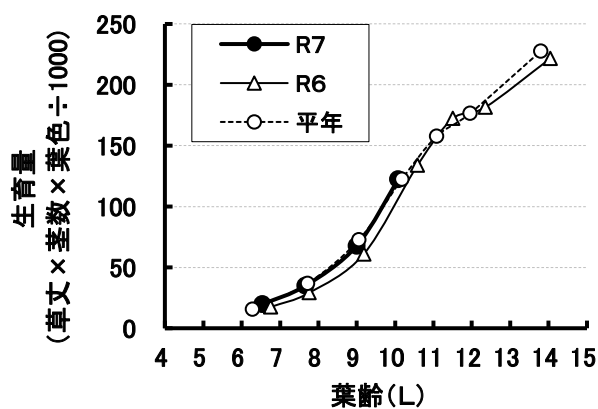


図5 生育量の推移（生観てんたかく）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数、葉齢及び葉色は並となっている。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月17日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R7	5月13日	36.6	21.2	456	9.0	4.3	41.6
R6	5月14日	36.7	21.5	458	9.0	4.3	40.7
平年	5月14日	37.2	20.9	455	8.9	4.3	40.7
前年比・差	-1	100	99	99	0.0	0.0	0.9
平年比・差	-1	98	101	100	0.1	0.0	0.9

注) 平年 : H27~R6 の平均

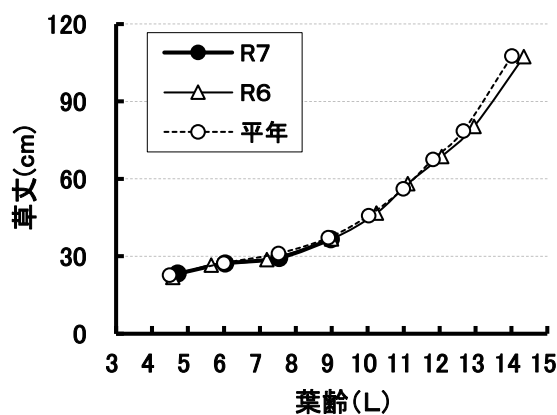


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

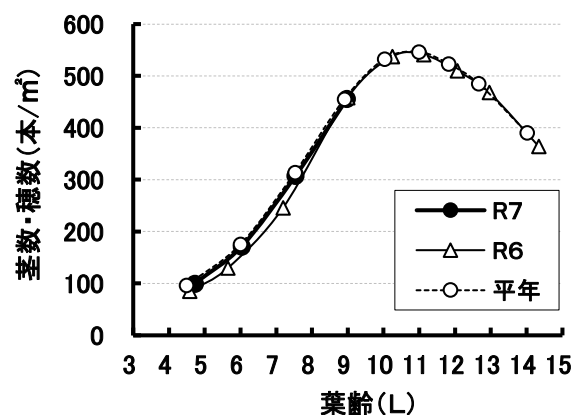


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

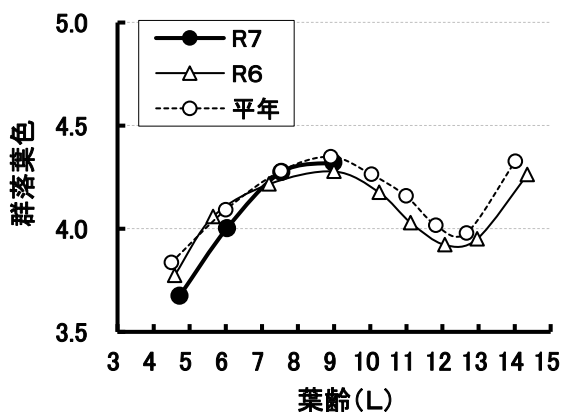


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

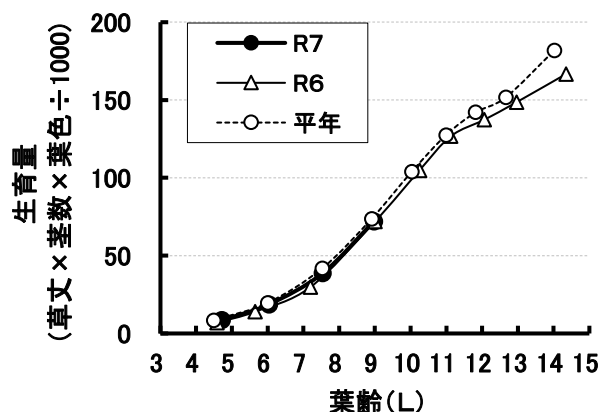


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

(3) てんこもり

平年に比べ、草丈は短く、茎数はかなり少なく、葉色は並、葉齢は1.0葉遅れている。
葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

表3 「てんこもり」の生育状況（6月17日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R7	5月12日	28.9	21.9	429	9.0	4.3	41.8
R6	5月8日	32.3	31.5	595	10.2	4.4	39.7
平年	5月8日	32.6	29.9	568	10.0	4.4	40.8
前年比・差	4	89	70	72	-1.2	-0.1	2.1
平年比・差	4	88	73	75	-1.0	-0.1	1.0

注) 平年 : H27～R6の平均

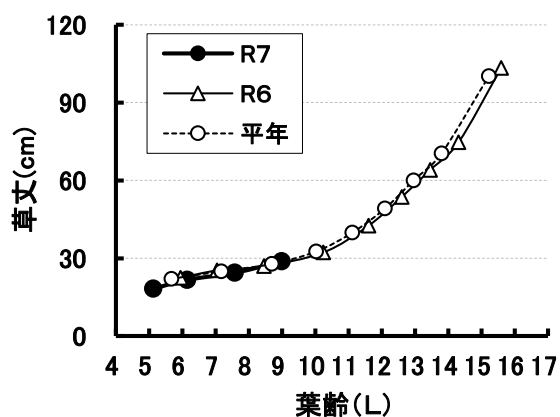


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

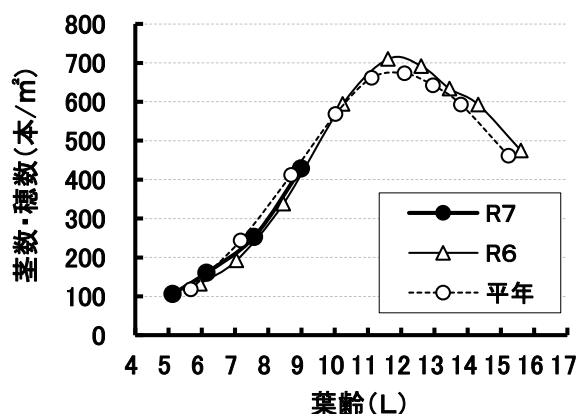


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

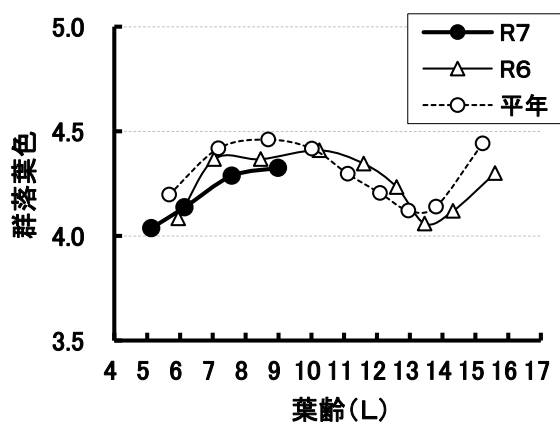


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

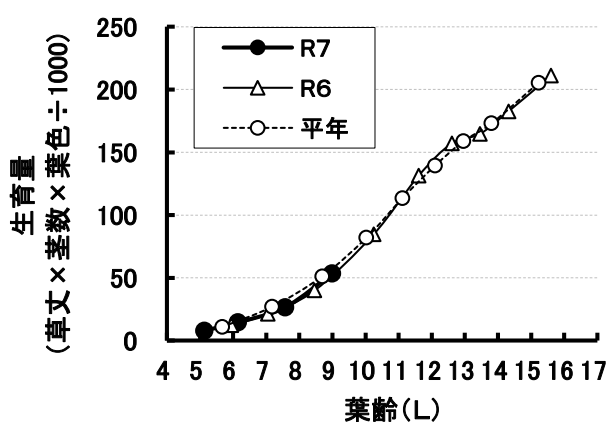


図13 生育量の推移（生観てんこもり）

3 当面の技術対策

- ・ 今後、気温がかなり高くなると予報されていることから、葉色の急激な低下を防ぐため、中干しとその後の間断かん水では干し過ぎの管理にならないように注意する。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。

（１）共通管理

- ・ 中干しを実施していないほ場は、早急に開始する。
- ・ 中干しは一度に強く干し上げず、「田面に小さな亀裂が入る程度」の田干しを数回繰り返し、地耐力を高める。
- ・ 中干し後は間断かん水を行い、幼穂形成期までに足跡深さ 3 cm 程度の土壌硬度とする。
- ・ 土壌が乾き過ぎると葉色が低下するため、干し過ぎの管理にならないように注意する。



写真 中干し終了時点のほ場の状態

中干しの終了時に、ほ場中央部でくるぶしまで軽く沈む程度を目安とする

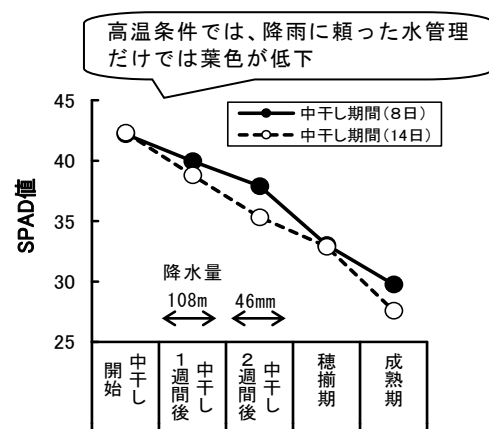


図14 中干し期間を長くした場合の葉色の推移（R6 新川農林振興センター）

注）沖積砂壤土での結果

（２）「てんたかく」の管理

- ・ 生育観測ほの幼穂形成期は、今後、平年並の気温で推移すると、6月24日頃と見込まれる。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、過剰籾数や倒伏を防ぐため追肥は原則施用しない。ただし、葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。
- ・ 分施肥系では、穂肥は表4を目安に土壌区分や生育量に応じて施用する。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理を行う。

表4 「てんたかく」の土壌区分別穂肥窒素施用量の目安(kg/10a)

土壌区分	1回目	2回目
	施用時期 幼形期	施用時期 幼形期の10日後
沖積 埴壤土	1.5	1.5
埴土	1.5	1.8
砂壤土	1.5～2.0	2.0
洪積 埴壤土～埴土	1.5	1.8

注) 以下の条件では1回目の穂肥を施用しない。
 埴土～埴壤土：幼穂形成期の葉色 4.3 以上
 かつ茎数 650 本/㎡以上
 砂壤土：幼穂形成期の葉色 4.5 以上かつ
 茎数 700 本/㎡以上

（３）「コシヒカリ」の管理

- ・ 安易な追肥は、過剰籾数や倒伏を招くので原則施用しない。
- ・ 作付前にケイ酸質資材や加里資材を散布していないほ場では、積極的にこれらの資材を施用し、稲体の充実を図る。

（４）「てんこもり」の管理

- ・ 幼穂形成期前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より淡い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a程度の追肥を行う。

(5) 病害虫防除の徹底

①斑点米カメムシ類

- ・ 5 月下旬の畦畔や雑草地における斑点米カメムシ類の発生がかなり多くなっている。
- ・ 今後の斑点米カメムシ類の増殖を抑えるため、イネ科雑草が出穂しないように草刈り等による畦畔・雑草地の除草対策を徹底する。
- ・ 本田内のノビエやホタルイは斑点米カメムシ類の繁殖源となるため、水田内雑草の発生状況に注意し適切な除草対策を行う。
- ・ 麦あとほ場はカメムシ類の繁殖好適地となるため、雑草が繁茂しないように管理するとともに、積極的に大豆、園芸作物、緑肥等を栽培する。

草刈り運動期間： 6 月 27 日（金）～ 7 月 6 日（日）
一斉草刈り日 ： 6 月 28 日（土）～ 6 月 29 日（日）

②ニカメイチュウ

- ・ 要防除水準（防除時 6 月中下旬のさや枯最盛期被害茎率： 3 %）に基づき防除要否を判定し、適期に防除する。
- ・ 前年に被害が多く見られた地域では、幼虫の発生がだらつくため、箱施薬剤を施用した場合でも必要に応じて適期に本田防除を行う。

③いもち病（葉いもちの初発確認日：前年 7 / 10、平年 7 / 10）

- ・ 箱施薬剤等を施用していない場合は、予防剤を 6 月中旬頃までに散布する。
- ・ BLASTAM 情報（農業研究所）を参考に常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。

BLASTAM 情報（葉いもち予測システム）はこちらから
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）



④紋枯病（紋枯病の初発確認日：前年 7 / 5、平年 6 / 26）

- ・ 前年多発したほ場などでは、出穂 3 ～ 4 週間前の粒剤散布や穂ばらみ期の防除を行う。
- ・ 本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。
- ・ 箱施薬剤と本田防除の体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表 5 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 （発病株率）	薬剤散布適期 （防除要否判定時期）
てんたかく	5 %	出穂 14 日前頃
コシヒカリ・富富富	15 %	出穂 10 日前頃
てんこもり	15 %※	出穂 7 日前頃

※てんこもりの要防除水準は暫定値

⑤白葉枯病

- ・ 常発地等では、出穂 3 ～ 4 週間前にオリゼメート 1 キロ粒剤等を散布する。
- ・ 大雨によりほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため、薬剤を散布する。

「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈、葉色は並、茎数は少なく、葉齢は0.3葉遅れている。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数は少なくなっている。

表1 「富富富」の生育状況（6月17日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色	
			(本/株)	(本/m ²)		葉色板	SPAD
R7	5月17日	30.6	16.3	355	8.3	4.4	44.1
R6	5月17日	31.7	21.0	458	8.6	4.5	42.9
近年	5月15日	32.2	20.0	430	8.6	4.4	42.1
前年比・差	0	97	77	78	-0.3	-0.1	1.2
近年比・差	2	95	81	83	-0.3	0.0	2.0

注1) R7：10ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・プラ削減 対照区：6ほ場）

注2) 近年値：H29～R6平均

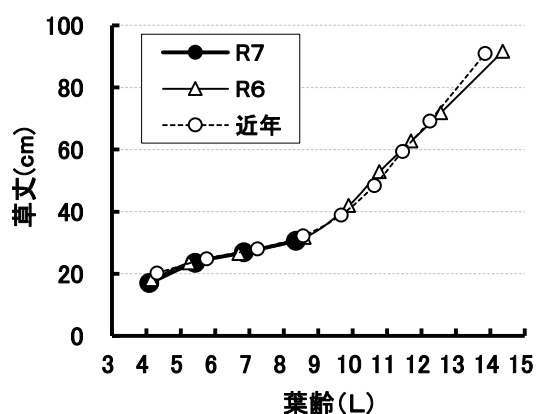


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

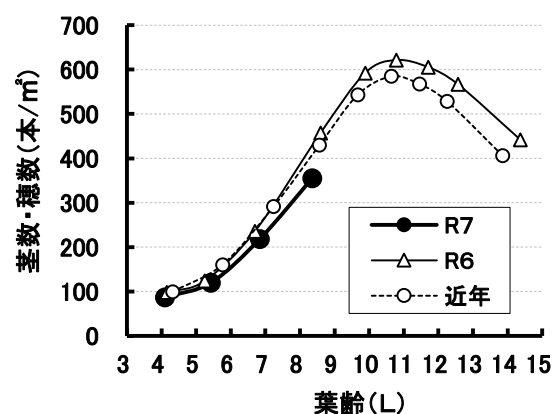


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

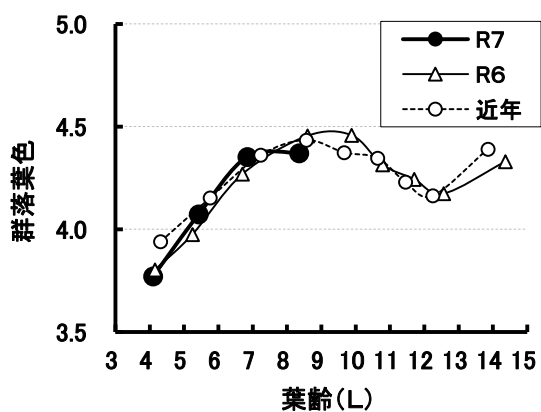


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

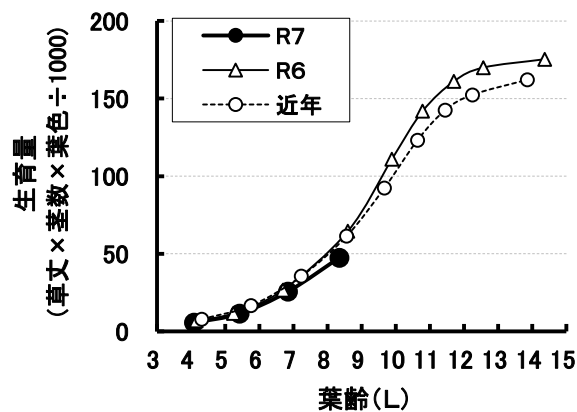


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）

2 当面の技術対策

- ・中干しは一度に干し上げず、「田面に小さな亀裂が入る程度」の田干しを数回繰り返し、地耐力を高める。
- ・「富富富」は葉色がやや濃く推移することから、中干し後は幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行う。

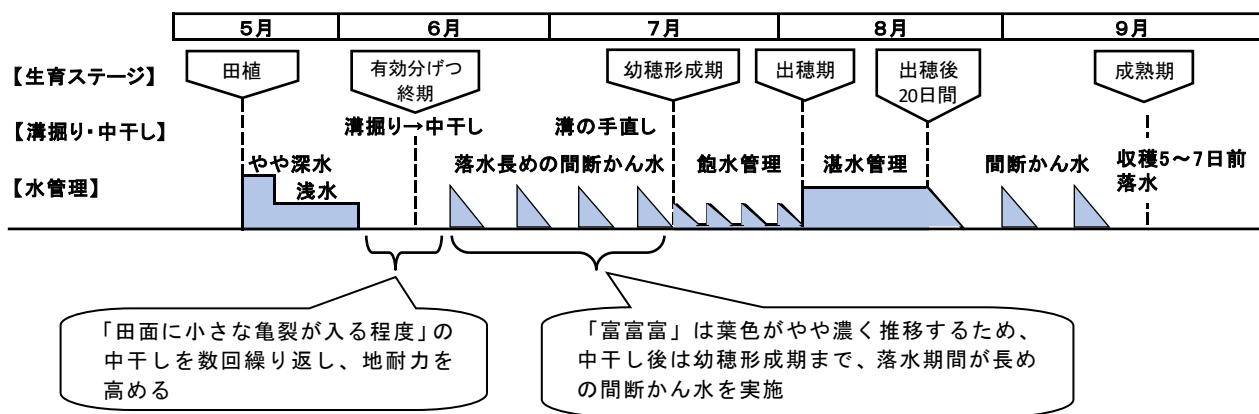
(1) 適正な中干しの実施

- ・中干しを実施していない場合は、早急に開始する。
- ・中干しは一度に強く干し上げず、「田面に小さな亀裂が入る程度」の田干しを数回繰り返し、地耐力を高める。

(2) 中干し後の水管理

- ・「富富富」は葉色がやや濃く推移し、過剰籾数により収量や品質が低下しやすいため、中干し後、幼穂形成期までは落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値を 35（群落葉色 4.0）程度に誘導する。
- ・ただし、令和 6 年度は高温による葉色低下がみられたため、高温時は干し過ぎないようにする等、気象条件に合わせた水管理（落水期間の調整）を行う。

<水管理のイメージ>



(3) その他の管理

病虫害及び雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通した化学合成農薬の成分使用回数が 12 以内となるように留意する。

なお、残草がある場合は、草種に対応した液剤等を用い、除草剤が雑草に確実に付着するように丁寧に散布する。

[参考 富山地方気象台 2週間天気予報 (2025年6月17日17時更新)]

